

年間第29主日 10月17日 分かち合い

今日の福音書が述べた出来事はエルサレムへの途上に起こった出来事です。これ以前に主イエスは受難予告を三度行いました。弟子たちはそれを聞いて、驚き恐れましたが、二度目まで弟子たちはこの受難予告がまだ理解できませんでした。三度目に彼らは正しくそれを理解し始めました。このような文脈から考えるなら、ヤコブとヨハネは、主イエスに従うことによってもたらされる自分たちの運命を理解し始めていたに違いないのです。すなわち、彼らは、エルサレムで何が起こるか、エルサレムで彼らを待つ出来事が恐ろしいものとなる、と知っていました。だから、彼らは自分たちを待ち受ける大変な運命を認めた上で、その苦しみの中には、主イエスの隣に座る栄光があって欲しいのです。栄光を待っているのであれば、エルサレムで始まる苦難は意味がない、そういうふうを考え、主イエスに栄光を願ったわけです。

しかし、主イエスは彼らの要求を断りました。なぜ主イエスが断りましたかということ、彼らに栄光を与えることを望まないわけではなく、むしろ苦しむことそのことに積極的な意味があることを教えるためです。苦しみはその後の栄光を待って始めて、という意義を持つものではありません。苦しみそのものに意味があります。ヤコブとヨハネにとっては、苦難は栄光を手に入れる手段だと思ってしまいます。しかし、主イエスはそのように考えておられません。苦しみは無意味ではなく、それこそが主イエスと交わり、主イエスに従う道なのです。それを示すために、主イエスは「このわたしが飲む杯、...このわたしが受ける洗礼」と述べて、「わたし」を強調するのではないかと思います。すなわち、今のところ、主イエスのように、主イエスと共にこの受難の道を歩む必要があるということでしょう。

ところで、主イエスの道は人々に仕える道です。この社会の中、少しでも高いところへ、競争して上へ上へと目指していきたい多くの人々がいるかもしれません。けれども、神様の前で、人間同士、誰が上で、誰が下で、ということとは関係ないのです。今日の福音で、主イエスは、「仕える者になりなさい」、「僕になりなさい」と言いますが、少なくとも、私にとっては解放の福音だと感じています。もしも、皆さんが上下関係などいろんな意味で人と比較して悩んだり苦しんだりしているならば、今日の福音を本当に解放の福音だと感じていただければ、と思います。「仕える者になりなさい」、「僕になりなさい」人間のレベルだけ見ていたら、損な生き方になるかもしれません。でも、神様との関係を見つめたとき、新たな光が与えられると思います。私たちはみな神様の僕(しもべ)だということに立って、そして、そのことを喜んで生きられる、という生きかたに招かれています。神様が私たちを僕として、私たちを仕える者としてここに置いてくださっています。

主イエスの道はまさにそういう道です。自分を無にして、徹底的に人々に仕え、人々のために自分の命までも差し出していく道、それが主イエスの道でしたし、私たちを解放していく道は、このイエスの道なのだ、ということをおぼえて、受け取って頂ければと思います。主イエスのように人々に仕えるために、報いを求めずに苦難を歩めたら、そのほうがはるかに素晴らしいに違いありません。ですが、恐れあまりよたよた歩く頼りない弟子ではあっても、主イエスの後を追っています。弟子とはそういう者なのでしょう。私たち一人ひとりが主イエスと共に、仕える者としての、そして、神の僕としての道に招かれていることを感謝しながら、今日のミサをささげ続けたいと思います。